

「さあ、君たちの出番です」～学園祭に寄せて～

(H29.8.31 2017学園祭パンフレット寄稿)

唐突ですが、卒業式の答辞を思い浮かべてください。古今東西、どこの学校でも必ず盛り込まれるのが、学園祭のエピソードです。高校生活の中でそれほど思い出深く、インパクトが強いのは一体なぜなのか。イベント自体が大々的で華やかだから。学校という環境にあっては相当に非日常的なものだから。まずはそうした要因が思い当たりますが、それだけではなさそうです。

学園祭は、創り出す主体が君たち生徒に委ねられます。であるがゆえに、自由で楽しい活動ができる反面、時として各人の考え方の違いも浮き彫りになります。さまざまな意見の対立や確執を経て、最終的に一つの作品が創り出される。部活動にも共通しますが、そうした「生みの苦しみ」という要素こそが、学園祭の印象をいっそう強くしていると思うのです。

どうやらこれは時代を超えた真理のようで、もう40年も前のことで恐縮ですが、ちょっと昔話に付き合ってください。

私の出身校では体育祭の組がクラス単位でなく、生まれ月によって6チームに編成されていました。3年生のとき私は応援リーダーの役についていたのですが、リーダー約15名のうち、この体育祭で初めて話を交わした同級生が約半数。お互い遠慮がちな雰囲気のまま準備が進みましたが、これがまずかった。互いの言い分や不満を徐々に溜め込み、それが本番の3日前、ついに爆発し衝突。応援練習のさなか、下級生の前でつかみ合いの醜態をさらしてしまいました。

衣装に関する思い出もあります。体育祭当日になってもリーダーの衣装が完成せず、半分キレながら教室に行ってみると、衣装係の女の子たちが、泣きながら針を動かしていました。実は、そもそもリーダーの求めたデザインが複雑すぎたことが原因。衣装は応援合戦にギリギリ間に合いましたが、演技本番中も、その女の子たちの表情が頭から離れませんでした。ほろ苦い思い出です。

さて、南高の学園祭です。2017年のテーマは“創×轟”。若々しく勇ましい響きです。

文化部による満を持しての発表をはじめとして、2年生の色別演劇・展示、1年生の音フェス、生徒会の各種企画から最終日の体育祭に至るまで、今年も盛り沢山のメニューがそろいました。すべて君たちのエネルギーが創り出した、一つ一つの尊い結晶です。

それぞれが乗り越えた「生みの苦しみ」に想いを致しながら、みんなでカー杯、堪能しましょう。